地域住民を対象としたワークショップ型「やさしい日本語」研修

友宗　朋美　　陳　雨詩　　劉　悦
クランツ　クラウディヤ　　伊藤　秀明

要　旨

本稿は茨城県神栖市の地域住民を対象とした「やさしい日本語」研修の報告である。茨城県神栖市では外国人住民の増加を背景にコミュニケーション手段として「やさしい日本語」の認知度の向上が課題であった。そこで、「やさしい日本語」の周知と理解の促進、継続的にコミュニケーションを楽しむことを目的に、ワークショップ型「やさしい日本語」研修を実施した。研修では「やさしい日本語」に関する講義のほか、Web ツールを使った書き換え、相手の関心に合わせた情報を「やさしい日本語」で伝えるワークショップなどをおこなった。研修後の参加者アンケートの結果からは、一定の評価が得られ、実践的な活動を通して理解を深められたと考える。一方で、外国人との接触頻度など背景が異なる参加者への対応方法や外国人住民への周知・参加の対応方法などには課題も残った。

【キーワード】「やさしい日本語」研修　ワークショップ　雰囲気作り　地域住民

Workshop-Type "Yasashii Nihongo" Training for Citizens

TOMOMUNE Tomomi, CHEN Yushi, LIU Yue,
KRANJC Klavdija, ITO Hideaki

【Abstract】 This is a report on a training course "Yasashii Nihongo" for the citizens of Kamisu City, Ibaraki Prefecture, which aimed to raise awareness of "Yasashii Nihongo" as a means of communication with the increasing number of foreign residents in the city. In addition to lectures, the training included workshops on rewriting activities using web tools and paraphrasing information in "Yasashii Nihongo" according to individual interests. The results of the participants' questionnaires showed that the participants were able to deepen their understanding through practical workshop activities. On the other hand, some issues remained that require attention to meet the diverse needs and backgrounds of the participants, as well as to promote the awareness and participation of foreign residents.

【Keywords】 "Yasashii Nihongo" training program, workshop, creating an atmosphere, citizens

1.「やさしい日本語」研修実施に至る背景

本稿では 2023 年 2 月に茨城県神栖市の地域住民を対象におこなったワークショップ型「やさしい日本語」研修について報告する。

日本の在留外国人は年々増加傾向にあり、2022 年末には 3,075,213 人と過去最高を更新し (法務省 2022)、国籍・地域の数は 190 を超えている。在留外国人の国籍が多様化する中で、地域社会の交流において日本語以外の言語を使用することは日本人住民にとって心理的負担度が高く (Ito et al. 2020)、同じ地域社会に住む人々の交流のきっかけ作りにおいて、異なる言語の使用が大きな壁となっている。このような背景を踏まえ、日本人住民にとって多様な言語を使い分ける言語的負担が少なく、かつ外国人住民にとっても理解できる言語でおこなう共通のコミュニケーション手段として、行政機関や地域社会を中心に「やさしい日本語」の普及が全国的に広がっている。

筆者らは 2022 年度に茨城県神栖市より「令和 4 年度やさしい日本語講座に関する学術指導」の一環として、神栖市の住民を対象とした「やさしい日本語」研修の依頼を受け、研修の企画立案・運営をおこなうこととなった。神栖市における「やさしい日本語」研修は 2020 年度から市役所職員を対象に研修がおこなわれている (伊藤ほか 2021)。この実践は伊藤ほか (2021) によると、市役所職員を対象としていることから業務を想定した窓口業務のロールプレイを取り入れた活動などをおこなっており、研修後のアンケート結果は概ね高い評価であった。その一方、グループワークの時間については「もう少し長くてもよかった」「やさしい日本語に直した方がよい単語について、検討、話し合いをする時間がもう少し欲しい」「実践や外国の方とのお話ももっとしてみたかった」などグループ活動や実践的なコミュニケーションの機会を希望するなど研修の改善点も報告されている。

2023 年度の研修では、伊藤ほか (2021) で挙げられた改善点を踏まえ、研修参加者と研修をサポートする外国人協力者とのコミュニケーションを増やし、「やさしい日本語」への理解を深め、自発的に「やさしい日本語」が使えるようになることをめざした。その上で、「『やさしい日本語』への理解を深め、自発的に『やさしい日本語』が使えるようになる」という目標を達成するために「Web ツールを使った書き換え活動」と「相手が興味を持っている情報について伝える活動」の 2 つのワークショップを企画し、ワークショップ型の「やさしい日本語」研修を実施することとした。

2. 事前準備

伊藤ほか (2021) が 2020 年度に実施した研修後のアンケートでは「外国人の方と実際にお話しできる機会があってよかった」など、実際のやりとりを通した活動への満足度が高かった。これを踏まえ、地域住民を対象とした研修でも実際のやりとりを充実させるた

めに以下の目的を設定した。

a)「やさしい日本語」の周知と理解の促進

b)参加者同士のやりとりが円滑に進められる雰囲気作り

c)参加者の「伝えたい」という気持ちを促進する活動

d)参加者が研修後も「やさしい日本語」の使用を考えられる工夫

この目的を達成するためにグループ活動と実践的なコミュニケーションの場面を想定した活動を取り入れることとした。そして、前半には「やさしい日本語」への理解を深める目的で「やさしい日本語」に関する基礎講義をおこない、後半に２つのワークショップで参加者同士が関わり、参加者の「伝えたい」「受講後も継続して学びたい」という気持ちを高められるような研修を企画した。また、研修企画時はワークショップのファシリテーションの主な困難さとして安斎ほか（2019）が挙げている（1）動機付け・場の空気作り、(2）適切な説明･教示、(3）コミュニケーションの支援、(4）参加者の状態把握、(5）不測の事態への対応、(6）プログラムの調整なども考慮した。特に（1）動機付け・場の空気作り、(2）適切な説明・教示、(3）コミュニケーションへの支援に関しては、研修内で使う動画の選定、グループワークの指示の出し方や声かけの仕方などを意識して実施前にリハーサルし、十分に検討をおこなった。

３．「やさしい日本語」研修の実施

３．１　研修参加者の概要

筆者らは、事前に参加者の人数・年齢層・日本語非母語話者の参加の有無を把握していた。本節では、参加者全員を対象におこなった事後アンケートの結果から明らかになった､参加者の年代･外国人と関わる頻度･話せる言語に関する情報を表１に示す。表１から、参加者の約７割が 60 代以上であったこと（網掛け）、関わる頻度は月に１回以下である参加者が約４割であったこと（網掛け）がわかる。また、話せる言語のうち、外国語として記述があったのは英語・中国語・マレー語・スペイン語・ベトナム語などであり、このような多様な言語環境の下では共通のコミュニケーション言語として「日本語」が有効であることが推察できる。

３．２　研修の流れ

研修は２時間半で、表２の流れでおこなった。受講人数は、日本語を母語とする参加者 24 名と日本語以外を母語とする参加者５名の合計 29 名であった。グループ分けは神栖市に事前に依頼し、５名程度のグループ６つに分け、各グループで机を囲んで座ってもらった。さらに後半のワークショップでは、日本人住民と外国人住民が実践的なやりとり

の活動をおこなえるよう、各グループに外国人住民および筆者らを含む外国人協力者[1]が１名ずつ入るようにした。

表１　研修参加者の基本情報

項目		人数	比率
年齢（年代）	70	16	55.2%
	60	5	17.2%
	50	1	3.4%
	40	4	13.8%
	30	2	6.9%
	20	1	3.4%
	合計	29	100%
外国人と関わる頻度	月に１回以下	13	44.8%
	週に２～３日程度	7	24.1%
	週に１回程度	2	6.9%
	毎日	5	17.2%
	無回答	2	6.9%
	合計	29	100%
話せる言語	日本語のみ	17	58.6%
	日本語と外国語	11	37.9%
	外国語のみ	1	3.4%
	合計	29	100%

表２　「やさしい日本語」研修の流れ

おおよその時間	活動内容
実施前	動画の再生
10 分	アイスブレイク
40 分	「やさしい日本語」に関する基礎講義
10 分	休憩
20 分	ワークショップ１(Web ツールを使った書き換え活動)
30 分	ワークショップ２(相手が興味のある情報を伝える活動)
10 分	振り返り
15 分	アンケート記入

３．３　アイスブレイク

研修開始前の参加者が集まり始めた際、参加者に「やさしい日本語」のイメージを掴んでもらうために、大分県立図書館(2021)が公開している「『やさしい日本語』でコミュニケーション！①(コミュニケーション編)」の動画を２回流した。この動画を使用した理由は、「外国人だから英語と思わず日本語や『やさしい日本語』で話す」「はっきり言う」「短く言う」「相手の様子を見ながら話す」などのポイントが紹介されていること、コミカルな動画であることから研修開始前の雰囲気作りとして有効であると考えたためである。続いて研修の開始に際して、各参加者が個人的な経験の共有を通して参加者同士がお互いのことを知り、グループワークを進めやすい雰囲気を作ることを目的に、グループで簡単な自己紹介(出身、職業、趣味、この研修に参加した理由)と外国人住民との接触経験な

どの共有をおこなった。

3．4　「やさしい日本語」に関する基礎講義

基礎講義では「やさしい日本語」ができた経緯や特徴への理解を促進するために、伊藤ほか(2021)で述べられている「やさしい日本語」の背景に加えて、神栖市の実態調査を踏まえた「やさしい日本語」の有用性や「やさしい日本語」の特徴について説明をおこなった。特に神栖市の現状として、神栖市の外国人住民289名に対する神栖市在住外国人ニーズ把握調査(神栖市2022)から、理解できる言語として「やさしい日本語」が英語や中国語などの外国語よりも回答数が高かったこと、神栖市の日本人住民に対する「やさしい日本語」意識調査(伊藤ほか2019)の「日本語だけで話せるとしたら話したいですか」という質問への回答が「話したい」が81.1%であったことから、神栖市に在住する外国人住民と日本人住民双方にとって「やさしい日本語」がコミュニケーションのツールとして有効であることを示した。また、コミュニケーションツールとしての「やさしい日本語」には絶対的な表現はなく、相手に合わせて調整することが重要であること、「外国人のために」という意識ではなく自身が「相手とのコミュニケーションを楽しみたい」という気持ちで使用していくことの重要性を述べた。

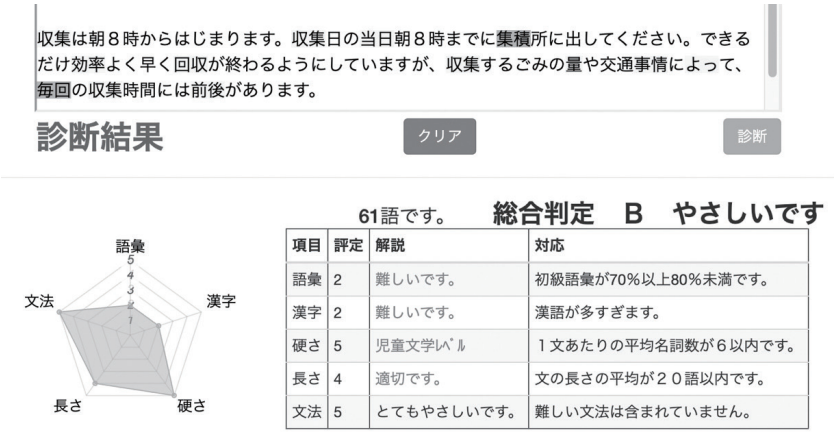
講義の最後に、ワークショップとつなげるために伊藤ほか(2021)で述べられている「やさしい日本語」の特徴7点を紹介した。

3．5　ワークショップ1

伊藤ほか(2021)で「やさしい日本語」に初めて触れる参加者に対しては一度シミュレーションをすることが提案されていたことから、本研修でもグループで時間をとって何度も書き換えながら「やさしい日本語」への理解が深められる活動を実施することとした。また、参加者が研修後も自律的に「やさしい日本語」が学ぶことができるようになる活動も合わせて検討した結果、Webツールである「やさにちチェッカー」(岩田ほか2015)を使用した書き換えの活動をおこなうこととした[2]。1つのグループに1台パソコンを用意し、神栖市のホームページに実際に掲載されている文章(下記、例を参照)をグループで相談しながら「やさしい日本語」に書き換え、書き換えた文章を「やさにちチェッカー」で確認していく活動を実施した。活動前の全体説明では、実際に「やさにちチェッカー」の画面を示しながら、語彙レベルと一文の長さを中心に説明した。研修実施者は、参加者同士のコミュニケーションを支援するファシリテーター役として1グループにつき1人加わり、グループで活動を進めた。図1は、「やさにちチェッカー」で例の文章を診断したものである。語彙・漢字・長さなどの評価項目ごとに文章の難しさが判定されることにより、評価項目を確認しながら文章をわかりやすく作り直すことができる。活動時は、自

分の作った文章を客観的に判定される機会の少なさからか「難しい」といった声が初めは多くあった。しかし、何度も入力し直すことで、話し合ったりメモを書いたりしながらグループ活動を進めている様子が見られた。また、「やさにちチェッカー」を継続的に使用するためにメモをしている参加者も見られ、研修後も自律的に学べる Web ツールを実際に使用してみる機会を設けることができた。

例：収集は朝８時からはじまります。収集日の当日朝８時までに集積所に出してください。できるだけ効率よく早く回収が終わるようにしていますが、収集するごみの量や交通事情によって、毎回の収集時間には前後があります。



項目	評定	解説	対応
語彙	2	難しいです。	初級語彙が70%以上80%未満です。
漢字	2	難しいです。	漢語が多すぎます。
硬さ	5	児童文学ﾚﾍﾞﾙ	１文あたりの平均名詞数が６以内です。
長さ	4	適切です。	文の長さの平均が２０語以内です。
文法	5	とてもやさしいです。	難しい文法は含まれていません。

図１　「やさにちチェッカー」で表示されている「例」の診断結果

３．６　ワークショップ２

ワークショップ２は参加者の「伝えたい」という気持ちを促進するやりとりの場の創造を目指し、個人の興味や関心を反映させたコミュニケーション場面を想定した会話活動をおこなえるよう、以下の流れで進めた。

研修実施者が好きなこと、知りたいと思うテーマを紹介し、そのテーマについて神栖市に関連する文章を 16 パターン記載した用紙を配布する。表３は書道、和食、パンが好きな研修実施者に関連した３パターンの文章の例である。参加者は表３のような文章が書かれている用紙を見て、「誰にこの情報を伝えるのか」をまず考え、次に「どんな「やさしい日本語」を使って伝えるのか」をグループで話し合う。グループで言い換えの表現を検討し、伝える準備が整い次第、その文章のテーマと関連する研修実施者をテーブルに呼び、研修実施者に「やさしい日本語」を使って口頭で伝える活動である。

本活動は実際に伝える場面をイメージした活動であるため、研修実施者から参加者へ質問をする形で会話を少し発展させたり、難しい表現を言い直してもらったりするなど、

双方向のやりとりも積極的におこなった。参加者の積極的な「やさしい日本語」の使用が多く、実際のコミュニケーションの場面のように話している際に相手の表情を見ながら言い換えてみるなど、参加者の理解度や「やさしい日本語」に対する姿勢が言動として表れた活動となった。日常的に外国人と接することが多くはない参加者にとって、外国人協力者と話すことが非常に有意義な時間であったと研修後アンケート（後述）でも記述されている。

表３　実際に使用したテーマの一部

書道教室で無料体験をしています。詳細はHPでご確認いただけます。	和食グルメの本が出版されました。特別な日にぴったりの和食100選が紹介されています。	メロンパンのしっとりとした生地と甘さ控えめのカスタードクリームは、まるでケーキのようです。

３．７　振り返り

最後の振り返りでは、当日の内容から気づいたこと、新しく知ったことをグループで話し合い、代表者が発表する形式で実施した。振り返りでは、日常的に何気なく使用している日本語をわかりやすく伝えることの難しさや、外国人住民だけではなく日本人住民同士のコミュニケーションにおいても重要であるとの気づきなどが多く聞かれた。

また、研修の最後に参加者が研修後も「やさしい日本語」を考えられる仕掛けとして、「やさしい日本語」の７つのポイントを記載したクリアファイルを配布した（図２）。クリアファイルとしたのは、日常的に使用するもので手に取る機会や研修参加者の周りの方々の目に留まる機会も多く、「やさしい日本語」の普及には適していると考えたためである。また、クリアファイルの残部は政策企画課に渡し、神栖市のさまざまな国際交流イベントなどで活用してもらえるよう配布を依頼した。

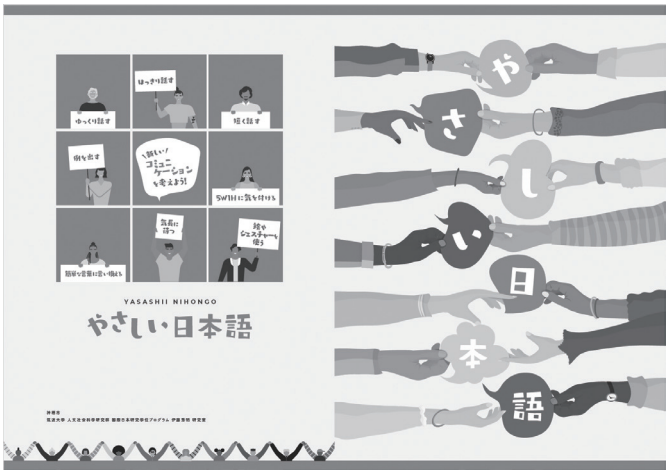


図２　「やさしい日本語」の７つのポイントを記載したクリアファイル

4．参加者アンケート

研修の最後に、参加者全員を対象にアンケート調査をおこなった。アンケートは堤・青山・久保田（2007）の研修のリアクションシートを参考に作成し、参加者の基本情報（表１）、参加した感想等に関する５段階評価および自由記述から構成されている。本節では、参加した感想等に関するアンケート結果を中心にまとめる。

参加した感想に関する５段階評価においては、「1：そう思わない」「2：どちらかといえばそう思わない」「3：どちらとも言えない」「4：どちらかといえばそう思う」「5：そう思う」という５つの選択肢を設けた。５段階評価の結果を以下の表４に示す。ただし、D-1 では 4.5 を選択（１名）、A-3、A-4、A-6、A-10、E-1、E-3 では記載なし（それぞれ１名）の誤記が見られ、これらの回答を集計結果から外した。

表４　研修に関する５段階評価の結果

		1	2	3	4	5
	A. 講座全体について					
1	講座を受講して良かったと思う	0	0	1	6	22
2	知り合いにも、この講座を薦めようと思う	0	0	5	12	12
3	今後もこの講座を継続していくべきだと思う	0	0	4	5	19
4	この講座の目的は、はっきりしていた	0	0	1	7	19
5	講座の時間は目的を達成するために丁度よい長さだった	0	0	3	15	11
6	講座の実施時期は適切だった	0	0	4	14	10
7	参加者の人数は適切だった	0	0	2	8	19
8	参加者の経験や知識に合致した講座内容だった	0	1	3	13	12
9	理論と実践のバランスが上手くとれた講座だった	0	0	3	12	14
10	講座内容はわかりやすい順序ですすめられていた	0	1	2	10	15
11	講座は自分の生活に適した内容で構成されていた	1	1	6	11	10
	B. 研修に参加するにあたって					
1	参加に際し、講座の目的や内容についてある程度知っていた	5	2	9	9	4
2	生活上で必要性を感じ、この講座に参加した	3	2	6	8	10
3	今回の講座内容を生活上、すぐに活用する必要がある	2	3	5	9	10
4	この講座を受講前、本を読むなど事前準備をおこなった	11	3	11	2	2
	C. 講座の感想について					
1	講座は自分にとって有意義な内容であった	1	0	1	10	17
2	自分にとって強化すべき能力が認識できた	2	0	4	6	17
3	講座の進行スピードと学習内容のバランスは適切だった	0	1	4	9	15
	D. 担当講師について					
1	講師は必要な知識を十分に持っている	0	0	0	5	24
2	講師は参加者の質問に丁寧に対応していた	0	0	0	4	25
3	講師は参加者を研修にうまく参加させていた	0	0	0	3	26
4	講師の講座への取り組み態度や姿勢に対し、好感が持てた	0	0	0	2	27
	E. 研修全体について					
1	この講座を受講して生活が改善されると思う	2	0	8	11	7
2	生活で学習内容を活用してみようという気持ちになった	2	0	3	13	11
3	学習した内容を活用できる環境が私の生活にはある	2	3	3	10	10
4	私のまわりの人は学習内容を生活で実践する際、理解をしてくれると思う	1	2	9	7	10
5	自分に必要な知識やスキルを学習できた	1	1	5	12	10

表４の A-1 の評価の平均は 4.7 であったように、本研修は概ね高評価を得ることができた。自由記述でも「とても参考になりました。常々やさしい日本語を意識して外国人と接していますが、さらに深まりました！」など肯定的な意見が寄せられた。「『日本語は世界一難しい』と言われてよろこんでいてはダメで、むしろとても不親切であると反省すべき」といった気づきのコメントも見られた。一方、A-9 や A-10 に関しては「〇〇：〇〇～××：××のようにタイムスケジュールを常時表示してほしい」という時間表示のコメントが２件あった。実際、後半のワークショップ１と２では参加者の進度に合わせて時間を調整できるよう、口頭で「20 分間でおこないます」と伝えた後は常時表示することをせず、参加者の様子を見ながら５分から 10 分延長しておこなった。参加者の理解度や活動進度により調整することも大切であるが、参加者に常時全体の時間配分などが見えるようにすることで話し合いの配分などを参加者も考えられるため、今後検討したい。

「B. 研修に参加するにあたって」の項目を見ると、参加者の講座の内容についての予備知識の量や実際の生活における必要性にばらつきがみられた。参加者の基本情報をまとめた表１と照らし合わせると、外国人と関わる頻度が高く、日常生活で必要性を感じている参加者もいる一方で、外国人と関わる頻度が低く、学習した内容を活用できない環境にいる参加者もいたことがわかる。今後はこのような参加者の背景を考慮し、それぞれに適した研修内容を模索していくことが求められる。また、研修に参加するにあたり、事前準備をおこなったのは１割程度であるため、知識の導入にポイントを置くことの重要性も示唆された。

さらに、「E. 研修全体について」からも、生活の改善や周囲の人への理解には課題があると感じている参加者も一定数いると考えられる。５段階評価の回答が１であった参加者の自由記述には「回りには外国人ゼロでどうしようもない」と記載があったが、日常生活で使用できる場面がない・使用できる場面が想像できないなども考えられる。他にも「外国人参加者をもう少し多くすると（いい）」「講習回数を増やし」、「研修を定期的に行えばよい」といった意見も見られた。継続的に「やさしい日本語」を考え、より多くの外国人住民を含む参加者、さらに参加者から周囲の人への発信なども可能にする研修のあり方を検討し、今後は活動を長期的・定期的に展開し、意識の醸成を目指していくことも重要であると考える。

５．おわりに

多様な地域住民の参加者を対象としたワークショップ型「やさしい日本語」研修は筆者らにとって挑戦的な試みであったが、アンケートの結果によると、一定の評価が得られたようである。また、筆者らに対して神栖市の職員からも「緻密に考えてくださった内容と、作り出してくださった柔らかい和やかな雰囲気のお陰で、参加者が一様に楽しそうに

活動していた姿がとても印象的でした」とコメントがあり、ワークショップ型の特徴である「雰囲気づくり」や参加者の「伝えたい」という気持ちを促すことができたと考える。

さらに、参加者アンケートの自由記述「今後市としての取り組んでいくといいと思うこと」には「町の広報紙なども今日(の)講義の内容のようにわかりやすくする」「市、学校、地域が一体になるべき」「やさしい日本語に言い換えるという試みは日本だけでなく他の言語を使うどの国々全体に必要な行動ではないか」「講習回数を増やし、参加者を増やして」いくことなど、個人的な使用の範囲を超えた「やさしい日本語」の普及や外国人住民への言語使用のあり方、より多くの参加者を巻き込む必要性についても言及しているコメントもあり、社会的な「やさしい日本語」の理解や重要性への理解も得られたと感じられる。

参加者の背景の多様化に関して、アンケート結果からも参加者の「やさしい日本語」に対するニーズや事前の知識の異なりが見られることがわかった。また、今回の研修には外国人住民の参加もあり、グループ活動では実際に外国人住民との「やさしい日本語」のやりとりもあった。今後は外国人住民にも多く参加してもらえるように広報をおこない、「やさしい日本語」を通した本物(authentic)のコミュニケーションを楽しめる機会を増やしたい。そして、講座でのポイントの解説と同時に、外国人住民と頻繁に接する場合にどのようなケースがあるのか、コミュニケーションの難しさや楽しさは何かなど、参加者のこれまでの言語が異なる他者とのやりとりの経験や「やさしい日本語」に対するイメージを共有するなど、参加者の事前知識や経験、母語の異なりを活かし、参加者同士の学び合いを促進するワークショップの形も検討していきたい。

謝辞

本研修は茨城県神栖市「令和４年度やさしい日本語講座に関する学術指導」の一環としておこなったものである。研修の開催に際して多大な御協力を賜った神栖市政策企画課の皆様、研修に参加してくださった神栖市の皆様にはこの場を借りて御礼申し上げる。また、本研修の運営に協力してくれた大学院生の NGUYEN XUAN NGUYEN HANH さん(筑波大学人文社会科学研究群国際日本研究学位プログラム博士前期課程)にも感謝申し上げる。

注

1. 筆者らに加えて大学院生１名の計６名が研修を実施した。
2. 「やさにちチェッカー」は入力した文章を、語彙・文法・漢字・長さ・硬さの５つの項目から文章の難易度を自動診断できる「やさしい日本語」を考える際に有用なツールである。

参考文献

安斎勇樹・青木翔子（2019）「ワークショップ実践者のファシリテーションにおける困難さの認識」『日本教育工学会論文誌』42 号：231-242

伊藤秀明・山田野絵・片山奈緒美 中嶋さくら・小野正樹（2019）「神栖市の多文化共生のための『やさしい日本語』意識調査と推進に向けた提案』」
https://www.city.kamisu.ibaraki.jp/shisei/machi/1003652/1003655.html（2023 年 10 月 4 日参照）

伊藤秀明・中嶋さくら・山田野絵（2021）「市役所職員を対象とした「やさしい日本語」研修－茨城県神栖市の事例－」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』36 号：13-22

岩田一成・森篤嗣・松下達彦・中島明則（2015）「やさにちチェッカー」
http://www4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichi1/nsindan/（2023 年 10 月 4 日参照）

大分県立図書館（2022）「「やさしい日本語」でコミュニケーション！①（コミュニケーション編）」
https://www.youtube.com/watch?v=AJyCWro9dCI（2023 年 10 月 4 日参照）

神栖市（2022）「在住外国人ニーズ把握調査 アンケート調査結果」
https://www.city.kamisu.ibaraki.jp/living/foreign/1008365.html（2023 年 10 月 4 日参照）

堤宇一・青山征彦・久保田亨（2007）『はじめての教育効果測定 - 教育研修の質を高めるために -』日科技連出版社

法務省（2022）「【在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表】（2022 年 12 月末現在）」
https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20220&month=24101212&tclass1=000001060399&result_back=1&cycle_facet=tclass1&tclass2val=0&metadata=1&data=1
（2023 年 10 月 4 日参照）

Ito, H., Yamada, N., Katayama, N., Nakajima, S., and Ono, M.（2020）“Community planning for multicultural coexistence -Internationalization of Kamisu City, Ibaraki Prefecture-”, *文明のクロスロード 12 多元性のパラダイムを求めて「中央アジアと日本における文化的・社会的多元性と共生」論文集*, Tashkent State University of Oriental Studies：127-137